

「豊かな心」「健やかな体」の育成につながる学習過程と評価

——「道徳科」「保健体育」「美術」の研究を通して——

宮 里 里加子*

城 田 亮*

上 原 進*

キーワード	豊かな心	健やかな体	道徳科	保健体育	美術
	道徳科学習カード	学習の記録の蓄積	出前研修		
	体育学習	武道	体づくり	個人内評価	



I はじめに

今回の学習指導要領（平成 29 年告示）の改訂は、平成 28 年 12 月の中央教育審議会の答申を踏まえ 3 つの基本方針に基づき行われた。その一つに「先行する特別教科化などの道徳教育の充実や体験活動の重視、体育・健康に関する指導の充実により、豊かな心や健やかな体を育成すること」（「中学校学習指導要領解説 総則編」第 1 章総説 1（2）①ウ）が示されている。

また、解説総則編における「主体的・対話的で深い学び」に関する記述の中で、小・中学校においては、「全く異なる指導方法を導入しなければならないことであると捉える必要はない。」と示され、これまで道徳に取り組み蓄積されてきた実践に基づき、「生きる力」の意義を改めて捉えなおす重要性が述べられている。つまりこのことは、加速度的に変化する社会にあって、汎用的な能力の育成を重視する世界的な潮流の中、あらためて「生きる力」を子供たちに育むためには、「何のために学ぶのか」という各教科等の学ぶ意義をより一層意識しながら授業改善に取り組むことが重要であるということを示している。

今回の共同研究では、特に学習指導要領第 1 章総則第 1 の 2 の（2）及び（3）「豊かな心や創造性の涵養」と「健やかな体」に関わりの深い道徳科、美術、保健体育において、これまでの学習指導要領の成果と課題を踏まえ、それぞれの教科等の特質に応じて、今後求められている具体的な改善事項に基づき、学習過程や評価の在り方について研究を行い学校現場への提案としたい。

II 研究内容

中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月）にて示された「現行学習指導要領の成果と課題」を踏まえ、今後の「教育内容の改善と充実」を実際の教育活動にどのように取り入れて行くのか、それぞれの教科が、今後意識すべき改善の具体的方策の一つとして以下表 1 に示す研究を行い学校現場へ提示する。

表 1

教 科	研 究 内 容	主な繋がり
道 徳 科	(1) 出前研修を通して見える沖縄県の道徳の現状と改善の方向性 ①意識調査分析 ②道徳推進教師の実態調査 ③学校の成果と課題 (2) 正しい見取りにつながる具体的方法と評価の在り方 ①「学習状況」と「道徳性にかかる成長の様子」の計画的な記録 (3) 「豊かな心」の育成につながる評価の在り方	豊かな心
保健体育	(1) 「豊かな心」の育成に向けた体育学習(武道) ① 武道実施状況 ② 空手道の特性 ③ 空手授業の導入例 (2) 「健やかな体」の育成に向けた体育学習(体づくり運動) ①夏期短期研修実践 ② 長期研修実践 ③ 体づくり運動実践例	豊かな心 健やかな体
美 術	(1) 「豊かな心」の育成と題材のテーマとの関係 (2) 授業展開と評価 (3) 美術の授業を通して生徒の変容とは	豊かな心

III まとめ

「豊かな心」と「健やかな体」の育成のために、教育内容の改善と充実について、各教科等にて今後取り組むべき具体的な改善の方策として実践例や成果物（道徳科の学習カード）で提示することができた。

*沖縄県立総合教育センター研究主事

< 道 徳 科 >

研究主事 宮 里 里加子

1 「豊かな心」の育成を目指した道徳科の教育内容の改善と充実について

学校における道徳教育は、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標としており、中でも特別の教科として位置付けられた道徳科はその中核的な役割を果たすものである。道徳科と豊かな心の育成は当然深く関わりがあり、適切な指導が豊かな心の育成を促すことはいふまでもない。今回の改定は道徳科にとって戦後最大の改革と言われ、先生方が向き合う大きな課題として「考え、議論する道徳」への転換と、一人一人のよさを伸ばし成長を促すための「評価」を充実させることが求められている。しかしながら、現実として多くの先生方が道徳の授業に悩み、望ましい評価の在り方を求めて日々学びを求めている状況が見られる。平成 29～31 年度の 3 年間で、当センターが主催する道徳の出前研修を実施した学校は小中合わせて約 150 校以上に及ぶ。これは、小学校の全面実施（平成 30 年度）の 1 年前から中学校の全面実施（平成 31 年度）の時期に一致する期間である。全面実施にあたって、より一層の授業改善と記述の評価の理解の急務に迫られ、各学校で校内研修が実施されてきたが、時間の経過とともに研修内容のニーズが変化し、それぞれの校種間の成果と課題を感じてきた。そこで今年度に出前研修を実施した小中合わせて 891 名の先生方にアンケートを実施し、その分析結果から、現在多くの先生方が抱える課題を見出し、今後の改善に向けての提案をするとともに、未だ試行錯誤の取り組みが続けられている評価において、学習の過程や成果などの記録を計画的に蓄積する補助資料の研究を行うことで、「豊かな心」を育む道徳科に役立つ提案としたい。

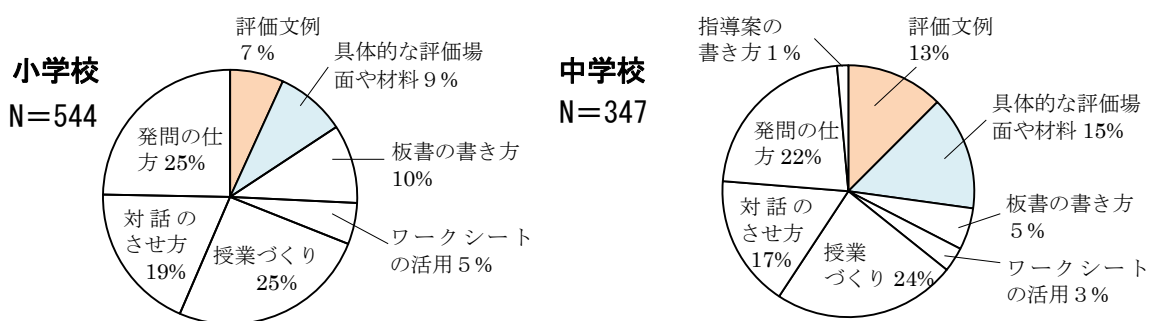
2 出前研修を通して見える沖縄県の道徳科の現状と改善の方向性

(1) 意識調査の分析より（※小学校 N=544、中学校 N=347）

今年度出前研修等で小中学校の先生方 891 名を対象にアンケートを行い、A 小中学校における道徳の授業に関する研修ニーズの違い、B 授業づくりと記述の評価に関すること、C 記述の評価に対する理解度、の 3 つの視点で分析を行った。

A 小中学校道徳科の授業に関する研修ニーズ

①道徳に関することで最も知りたいと思うもの 3 つを選択



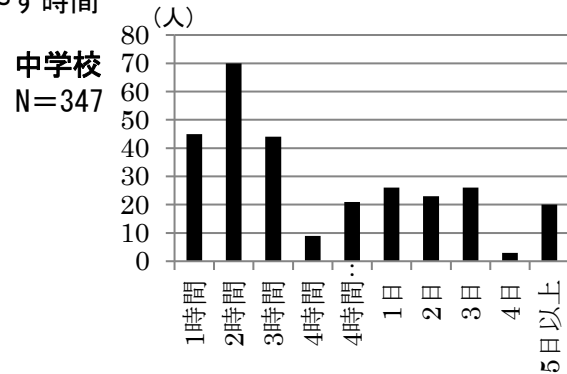
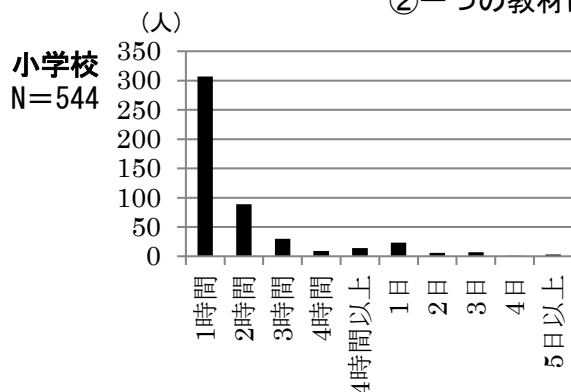
小中ともに研修のニーズトップ 3 は「授業づくり」「発問の仕方」「対話のさせ方」という同じ結果が出た。大きく異なる点は、中学校が記述の「評価文例」「具体的な評価の場面や評価の材料」の割合が高い点である。これは、今年度から道徳科が全面実施となったことにより研修ニーズが高まったことが要因であると思われる。小学校も前年度同じような傾向が見られたが、評価の在り方について理解が広まりつつあるのと、授業改善あつての正しい評価という重要性が再認識された結果、授業づくりのニーズが高まったと言える。同様に、今年度小学校における依頼内容は授業づくりが大半を占める傾向が見られた。

B 授業づくりと記述の評価に関すること

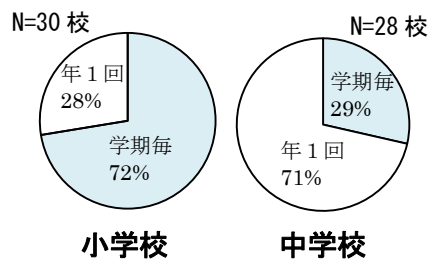
授業づくりにおいては、小学校より中学校の方が教材研究に費やす時間が長い。その理由の一つとして考えられるものは、ほとんどの教科を学級担任が受け持つ小学校では一つの教科の教材研究に多

く時間をかけることができないという環境が考えられる。中学校では教科担任制であるため週の教材研究が自分の専門教科と道徳、学活を入れても週約6種類程度で収まるが、小学校は週時定の数の教材研究が必要である。持ち時数に変わりはないものの教材研究の数や種類が道徳にかかる教材研究の時間に影響を及ぼしていると考えられる。小学校はチームで協力し効率よく教材研究を進める必要がある。

②一つの教材に費やす時間



③通知票への評価



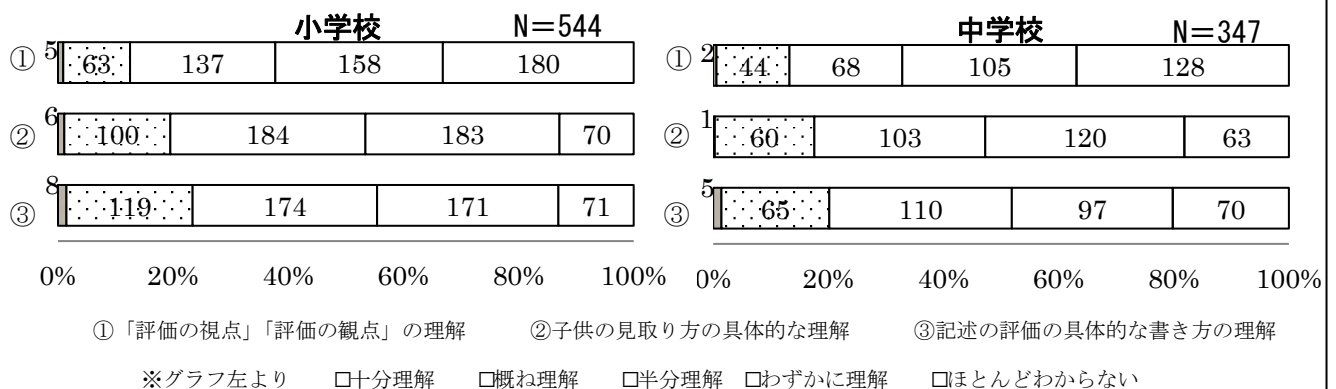
④評価に費やす時間（小学校）

N=544

学級規模(小学校)	10人以下	20人以下	30人以下	40人以下
時間で答えた平均(時間)	5.0	7.3	4.5	3.3
日数で答えた平均(日数)	1.9	2.3	3.7	3.5
最短時間	2時間(2人分)	4時間(11人分)	6時間(28人分)	1時間(34人分)
最長時間	3日(8人分)	10日(12人分)	15日(26人分)	21日(31人分)

通知票への評価においては、小学校が学期毎の評価が7割を超えるのに対し、中学校ではその逆の年1回の評価が7割を占める結果となった。その理由の聞き取りでは、今年度初めての評価をするにあたり、職員で共通理解を図り慎重に行いたいという回答が多かった。実際の評価に費やす時間では、上記④の表の結果となった。学級規模や評価の仕方個人差が大きく出たが、初めて行う評価に対し、他教科以上に多くの時間をかけ、慎重に記述の評価を行ったことが読みとれる。また傾向として、教材研究に時間をかける先生ほど評価に費やす時間も長いという相関関係があり道徳科への慎重な姿勢が読み取れた。

C 記述の評価に対する理解度



Cの結果から小中とも評価に関する①から③の3つの項目において正しい理解をしているのは、約20%未満であることがわかる。とりわけ①「評価の視点」と「評価の観点」の使い分けは低く10%台に止まる。評価の捉えや指導案に記載された評価においても、到達目標、実現状況と誤った理解で示された例が多く見受けられるが、このことは、評価の捉えや方法の理解不足が要因だと考えられる。

(2) 道徳推進教師・校内研修担当教師への聞き取り

訪問校の推進教師に直接聞き取りを行い校務分掌の任命等に関する調査を行った。

	推進教師の年齢				任命に関すること	
	20代	30代	40代	50代	学校長選出	昨年より継続
小学校(N=30校)	3人	11人	10人	6人	100%(30校)	13%(4人)
中学校(N=28校)	4人	10人	12人	2人	39%(11校)	17%(5人)

今回、実際の聞き取り調査は、出前研修に訪れた学校の推進教師を対象としたため、抽出校の分析になるが、推進教師を担当する年齢層は小中ともに30代から40代の中堅教師が最も多い。選出のされ方では、小学校が100%学校長からの選出に対し、中学校では約4割が各学年からの道徳担当が集まり、その中から自治的に推進教師を選出している実態があった。自ら使命感をもって推進教師を自主的に引き受けた先生もいるので一概には言えない面もあるが、推進教師の重要性に対する学校長の意識の差が見られる。一方で、昨年度からの継続した任命にいたっては、小中ともに10%台に留まっている。推進力を継続させるためには、PDCAのサイクルを回す必要があり、推進教師が継続して分掌を担当することが望ましいと思われる。

(3) 教科化に向けた組織体制における学校の成果と課題

3年間の出前研修のニーズや今回のアンケートで以下の課題が挙げられる。

【成果】

- 小学校においては、全面実施の2年目にあたり、記述の評価への理解が進みつつある。その中で基盤である授業改善に立ち戻り、校内での公開授業等の共通実践の取り組みが増えてきた。
- 道徳推進教師の役割が徐々に重視され、中堅教師が推進力となる組織体制が進みつつある。

【課題】

- 学校長のリーダーシップの元、学校のカリキュラムマネジメントが重要である。特に中学校は担任と担任外の道徳の授業に対する温度差が課題である。
- 道徳推進教師の意図的な任命や複数年の継続した取り組みで校内研修等の充実を図る。
- 「授業づくり」や「評価の在り方」への理解を図るため校内全体で共通理解、共通実践を図る。

3 正しい見取りにつながる具体的方法と評価の在り方

(1) 「学習状況」と「道徳性にかかる成長の様子」の評価の手がかりとなる計画的な記録

道徳科がスタートし、子供の「学習状況」や「道徳性に係る成長の様子」を公定表簿である指導要録や通知票に記することになった。しかし、道徳性そのものを評価したり、学習の実現状況や到達状況といった誤った評価が多く見られる。そこで今回の研究において、子供の学びの足跡が蓄積できる学習カード(図1)、座席表を利用した補助簿の活用を通して、子供にとっては学びの実感に繋がり、教師にとっては、記述の評価の手がかりや授業改善として役立つものを作成し、実際に学校で試験的に使用し(与那原小学校¹⁾、神森小学校²⁾、糸満中学校³⁾)、その効果を確かめた。

道徳科
心のつばやき

Kuwitter

浦添市立 神森小学校

6年3組 番 名前

表紙

書き方例

いろいろな心(気持ち)の例

(2) 学期 道徳科 つばやきシート

学期の振り返り

図1 学習カード(道徳科 心のつばやきカード)

1) 上地真由美教諭 2) 下地孝枝教諭 3) 前田佐綾香教諭の協力の下、複数の先生方に活用していただいた。

いろんな心（気持ち）の例



(おもしろかった)



(わかった・発見)



(むずかしい～)



(もっと考えてみたい)

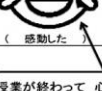


(やってみよう)



(感動した)

書き方の例

	日付	教材名	心	つぶやき
1	9/13 [金]	スポーツの力		苦しさや辛さを乗り越えるために、新たな夢や目標を持つことが胸を張った生き方につながるんだなあ。
2	9/20 [金]	あなたはすごい力で生まれてきた		友達の意見、先生の話、今日は心にジーンときた。命を大切にお母さんに感謝したい。

今日の授業の日付
教材名を書こう！

授業が終わって心で
感じている気持ちを
顔で表現してみよう！
下の例から選んでみて！

顔が表す心のつぶやきを書きま
しょう。学習して思ったことを素直
につぶやいていいよ！
授業が終わって直後の心の声を
自由に表現してみよう！

図2 記載されている日々の学びの足あとの記載例（高学年・中学校用）

(2) 学習カードの良さ ※学習カードはExcelデータにてホームページ掲載予定

このカードは、子供が授業後に感じた気持ちを顔の絵文字で表現し、「つぶやき」の部分には、その顔を書いた理由を書き記していく（図2）。1時間の学びの直後の「つぶやき」は、授業で感じた子供たちの本音（心の余韻）が現れるのではないかと考えた。授業の振り返りとは別に、短い時間を利用して記入していく。この記録を蓄積することで、顔の絵文字の連なりや「つぶやき」を分析すると、子供がどのように道徳の授業を積み重ねてきたか、「学習状況の様子」と共に「道徳性に係る成長の様子」の一部も読み取ることができ、教師にとっては、評価する際の手がかりとなり得る資料の一つである（図3）。そして子供にとっては、自分自身の学びの積み重ねを実感できる良さを感じ取ることができると思われる。また、このカードには、学期の振り返りが綴られていて（図1）、**①**一番心に残っている授業とその理由、**②**グループでのお互いの話を聞いて考えたこと、**③**道徳の授業での学びや、自分が成長したと感じること、の3つの設問で自己評価をする欄がある。日々の授業記録と学期全体を通しての学びの足跡が1冊にまとまっていることで、子供も教師も学習状況の成果と変容を容易に振り返ることができる（図3・図4）。

(2) 学期 道徳科 つぶやきシート

(6) 年 () 組 () 番 名前 ()

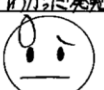
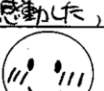
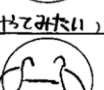
	日付	教材名	心	つぶやき
1	10/3 [木]	ひきょう だよ		たかひろさんの気持ちに なって考えも持てた。 場のひきょうなども深く 考えてみたい。
2	10/9 [水]	祖国に オリーブを		和田さんの日本愛がうつく しく、日本人としてほほえみに なる気持ちがあるんだなと 思いました。
3	10/11 [金]	米百俵		虎三郎と善士達の意見と ともに深く考える事が できた。
4	10/31 [木]	日本を守る ために へい戸城 無血開城		良心に従って「信念をたゆめ ないこと」は、どうして善か 友達と深く考える事が できた。
5	11/7 [木]	六人の 命の七ツ		「よく生きる」ということの 意味を忘れずに、これから 仲間や命を大切に して生きていく。
6	11/14 [木]	青い海を 取り戻せ		自分の力の源は、自分がや ってきた事でみんなが元気 になって、みんなの笑顔で自分 も笑顔になって、みんなを 笑わすために頑張った。
7	11/29 [金]	平和を 求めて		お互いの良さを尊重し合 い、困った時は支え合い、平和 の時はお互いの平和の大切 さを改めて知った。

図3 実際の子供のつぶやき

自分の日常と結びつけて思考している、学びの成長

○道徳で学んだことを、ふと日頃思い出すようになりました。
自分が振り返られたりして自分も成長したと思った。

○自分の身の周りについて自分がどう考えているか自分をみ
つめることができた。

深く思考するようになった学びの成長

○成長したかはわからないけど、色々事を学べました。よくあ
る日常で自分の言葉に相手はどう思っているかなど、なぜなん
だろうと、疑問に思っていたことの解決につながりました。

○自分が成長したなと考えたのは、相手の気持ちや生命の大切
さをいつもよりもっと深く考えることができるようになった
ことです。

自分の思考の仕方の変化を実感している様子

○1 学期は、ワークシートや学習カードに書きたいことがなく
て内容も似たり寄ったりだった。2 学期後半になって感想や振
り返りたい事がたくさんでるようになった。またその自分の気
持を整理して大事にする力が成長したなと感じた。学習カー
ドではいつもと違う方向の「わかった、発見」が多くなってい
ることに気づいた。

○行動に関しては、いまいまだけど、何か授業が終わった後に
考えるようになった。

他者の意見を聞き入れ多面的・多角的に考え変化

○自分だけの意見で考えるのではなく、友達の意見も認められ
るようになった。

○小学校の時よりも、皆の意見を聞いて、自分と違う考えをし
ていたんだと感じることができました。いろんな価値観があっ
て深く考えさせられた。

図4 学期の振り返り記述の分析

(3) 座席表記録シートを活用した学習状況の記録と計画的な見取り

教師側の観察記録として、図5の座席表を利用した記録方法を試みた。この記録の特徴は、子供の優れた学習状況の記録を1ヶ月分（4教材）のまとまった記録として見るができる。この座席表には、その月で指導した教材名を書く欄があり、例えば1週目の教材名を赤で記載した場合、この授業で見られ得た子供の良さも赤で記すという具合に、教材毎に色を分けて記録することで、子供の良さがどの授業での現れかを判別することができる。教師は授業後、特に印象に残った子供の「学習状況」を2～3名記録し、日々習慣として行うことで、記録する負担を減らすことにもなる。また、ここで重要なことは、子供の良さをどのように見取るかということである。例えば「今日はたくさん発表していた」「振り返りがいつもよりたくさん書けた」等、内容には触れず外身の部分のみの誤った視点では、正しい評価につながらない。そこで、このシートには、4つの視点を記載した（学習指導要領解説特別の教科 道徳編に明記された「個人内評価としての見取りの視点」を参考）。その視点に沿って学習状況の良さが出現した際に、子供の学習状況を記録する。また、もう一つの活用方法として、学期を通して続けた後に、未観察の子供を把握することで次学期の計画的な見取りにつなげるという長期的で意図的な教師の見取りも行える。この座席表を利用した学習記録の補助簿は、教師の観察により、子供の「学習状況」の良さを記録し把握するものであるが、1ヶ月に1枚、年間約11枚の座席表のシートを蓄積し、比較分析することで、「道徳性に係る成長の様子」も見えてくるのではないかと考えられる。実際、活用した先生方からは、「記述の評価をする際の資料として大いに役立っている」「子供を客観的に、継続的に見ることで、授業の指導の効果を実感でき、授業改善にも役立つ」という声を得ることができた。この試験的な観察記録方法を今後継続して成果を分析する必要がある。

図5 実際の子供の学習状況の記録

(4) 学習カードと座席表補助簿の活用にあたって（留意点）

個人内評価を適切に行うためには、見取る際の各学校で定めた「評価の視点」を共通確認することが重要である。また、「子供の学習状況」や「道徳性に係る成長の様子」をどのように把握するかを具体的な場面や補助簿等の記録方法、蓄積された指導記録からどのような道徳性に係る成長が読み取れるか分析し考察する等して、全教師で正しい評価の在り方の共通理解を深めることが重要である。評価することが目的にならず子供にとっては学びの実感となり、教師にとっては指導の改善に役立てることが最も大切であり、評価のための評価とならないようにしなければならない。

4 「豊かな心」の育成につながる道徳科の評価の在り方

道徳科の評価は、道徳心といった道徳性や愛国心、公德心、家族愛といった道徳的価値が対象ではない。子供が道徳科の授業においてどのように学びをしたのかという学習状況や道徳性を養うための授業の中で見られた学びの成長の様子を捉えて記述するものである。誤った評価（到達状況や出現状況、観点や規準を設ける評価）は価値の押し付けや道徳性を養うための学習に逆行する恐れがある。

よって、子供が自らの成長を実感し、さらに意欲的に学ぼうとする思いをふくらませるような「認め、励ます評価」のためには、道徳の評価の在り方の正しい理解が課題である。『学習指導要領解説特別の教科 道徳編』第5章「道徳科の評価」を熟読し、評価に対する理解を早急に深め、日々の道徳科の授業に対する評価（授業改善）と両輪で進めていく必要がある。また、道徳科は子供の人格そのものに影響を及ぼすものであるからこそ、学校長のリーダーシップの下、道徳推進教師を中心に授業改善や評価において慎重かつ組織的・計画的に継続して取り組むことが望まれる。

< 保健体育 >

研究主事 城 田 亮

1 「豊かな心」「健やかな体」の育成を目指した保健体育科の教育内容の改善と充実について

中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月）にて示された「現行学習指導要領の成果と課題」では、①グローバル化する社会で、日本固有の武道の考え方に触れる。②東京オリンピック・パラリンピックの意義や価値等を理解させる。③体を動かす楽しさや心地よさを味わわせ、運動やスポーツの習慣化につなげるため体づくり運動を充実する。としている。また、スポーツ基本法では、「心身の成長の過程にある青少年のスポーツが、(略)、国民の生涯にわたる健全な心と身体を培い、豊かな人間性を育む基礎となるものである」とされている。

このことから、保健体育授業で「豊かな心」「健やかな体」の育成につながる、これまでの実践事例や各研修での取り組みなどを紹介し学校現場での参考としていただきたい。

2 「豊かな心」の育成に向けた体育（武道）学習について

新学習指導要領の改善の具体的事項の中で「グローバル化する社会の中で、我が国固有の伝統と文化への理解を深めるため、日本固有の武道学習の内容等について一層の改善を図る」「東京オリンピック・パラリンピック競技大会の意義や価値等の内容等について改善を図る」と示している。このことから、武道の特性である相手を思いやる心や伝統文化への理解、オリンピック・パラリンピックの意義や価値等の理解を通して、生徒の「豊かな心」の育成につながることとし、「武道」を取り上げ、ここでは、沖縄県発祥の空手道を取り上げる。

(1) 県内中学校の武道（空手道）実施状況

平成 24 年度から、武道が必修化され、柔道・剣道・相撲に加え、「地域や学校の実態に応じて、なぎなた等のその他の武道についても履修させることができること」と示され、取り組みが始まった。このような中、沖縄県の空手道の実施校は、平成 28 年度、国公立・私立中学校 156 校（休校 2 校除く）中、133 校（85%以上）で実施されている。また、体育祭などの集団演武としても県内各学校で取り入れられている。

(2) 空手道の 2020 東京オリンピック種目採用

競技として「空手 1 プレミアリーグ 2014」が開催される等、オリンピックに向けた気運が高まり、空手道関係者の永年の努力により、2016 年に空手道の東京オリンピック種目採用となった。「伝統文化としての空手の保存・普及」と「スポーツとしての空手道の普及・発展」のため「空手」発祥の地としての沖縄県の果たす役割は大きい。

(3) 武道（空手道）の特性について

空手道は、武器を一切使用せず、徒手空拳での護身技術が体系化された沖縄を発祥とする武道である。基本動作や形の稽古は、一人でも限られた狭い場所で練習ができるため取り組みやすいなど、生涯にわたって実践しやすい。そのため、世界で約 1 億人の愛好家がいると言われ空手人口は増加している。また、「形」や「組手」は、相手の動きを想定し攻防する伝統的な動きや、相手の動きや技に対して攻防する技を習得した喜びを味わうことができる。

(4) 空手授業の工夫について

空手の特性から、「形」の稽古が授業に取り入れ易いため、多くの学校にて実施される、空手道だが、伝統文化や礼法、オリンピックの意義や理解につながるよう授業の工夫は大切である。

ここでは、武道の「礼に始まり礼に終わる」と言われる、相手を尊重し合うための独自の作法、所作を守ることに取り組ませながら、伝統と文化を理解することや、世界で活躍する県選手を取り上げることでオリンピックの意義や理解につながるような内容について学習指導を提示する。

【学習指導案 「空手道の歴史」授業導入例】

1 単元名 武道「空手道」 空手道の歴史とオリンピック

2 本時の目標（1 時間目／○時間中）

- (1) 空手道に関心を持ち、歴史的特性、礼法、オリンピックの意義などを理解する。
- (2) 授業の進め方や約束事項を確認し生徒が見通しを立てて学習する。

	主な学習活動・内容・発問等	指導上の留意点	評価方法・評価規準
導入 15分	1 健康調査 2 アンケート調査 3 単元の流れについて説明 4 本時の学習内容の確認	・大きな声で返事をさせる ・単元全体の流れを把握させ、理解させる	
展開 30分	5 空手道の歴史やオリンピックについて学ぼう (礼・節も含む) 6 ワークシートの記入 7 形競技の映像視聴 (世界で活躍する本県選手)	・空手道学習について意義とねらいを理解させる ・資料を活用し、効率よく生徒の興味関心が引き出されるよう説明を工夫する ・分からないところは資料を見るよう促す ・映像を視聴し空手道のイメージを掴ませる	・空手道の歴史を知り、空手道が沖縄の伝統文化であることを理解できたか ・ワークシートで確認
まとめ 5分	8 学習カードの記入 9 次時の説明 ①礼法（立礼、座礼） ②立ち方 ③突き ④受け	・本時の振り返りを行いながらキーワードとなる言葉を書かせる	

【ワークシートの活用(例)】

- (1) 1800 年代末期頃まで、「唐手（トーディー）」は、その形（かた）の特色、教習体系、伝承地名にちなんで、以下の3つに分類される。
- ①（ 首里 ）手 → 首里城を中心に首里士族の間で発達した。
 - ②（ 那覇 ）手 → 那覇西町を中心に久米・泉崎・西付近で行われた。
 - ③（ 泊 ）手 → 泊方面で広く行われた。

(2) 学校体育への導入と大衆化

1905 年、（ 糸洲安恒 ）は、「唐手（からて）」として県立中学校に初めて正課体育に導入した。これ以降、運動会等で唐手・古武術が演武されるようになり大衆化が図られた。

- (3) 2020 東京オリンピックで活躍が期待される本県出身の選手は（ 喜友名 諒 ）選手である。

3 「健やかな体」の育成に向けた体育（体づくり運動）学習について

新学習指導要領の改善の具体的事項の中で「体を動かす楽しさや心地よさを味わうとともに、健康や体力の状況に応じて体力を高める必要性を認識し、運動やスポーツの習慣化につなげる観点から、体づくり運動の内容等について改善を図る。」としている。このことから、体づくり運動の特性である、体を動かす楽しさや心地よさを味わわせ、心と体をほぐしたり、体の動きを高める方法等の学びを通して、生徒の「健やかな体」の育成につながることとし、「体づくり運動」を取り上げる。

(1) 夏期短期研修より

今年度、中高短期研修（7/24 実施）、小学校短期研修（8/16 実施）では、講師を招いて体づくり運動について事例演習を行った。参加した教師は積極的に取り組み、関心が高く、早速、授業で使いたいとの声が多く聞かれる等、好評であった。（写真1）多くの事例を紹介することで、今後の授業づくりに役立つものと考えている。



写真1 夏期短期研修の様子

(2) 長期研修より

平成 30 年度後期長期研修員が「体づくり運動」をテーマに研究に取り組んだ。脈拍測定や腹式呼吸を取り入れ、静→動や個→集団等、体づくり運動の工夫を行った。(図 1) そうすることで、「呼吸が浅かったが、運動後には呼吸が深くできているような気がした」等のリラクゼーション効果についての声があった。また、「運動が苦手な私でも楽しむことができた」等、手軽な運動により体を動かす楽しさや喜びを味わえたとある。さらに、検証後の自己評価から「少しの運動でも毎日続けることが大切」などの記述が見られた。「体づくり運動」の指導の工夫を通して、生徒に体を動かす楽しさや喜びを味わわせることができるとしている。

(3) 「体づくり運動」授業の工夫について

体づくり運動は、体ほぐしの運動と体力を高める運動で構成されている。ここでは、体を動かす楽しさや心地よさを味わえたり、心と体の関係や心身の状態に気づき、仲間と積極的に関わらうことをねらいとした学習指導を提示する。

【 実践例（体ほぐしの運動） 】

活 動	人数	準備・音楽
脈拍測定		
1 体ジャンケン	1 人	太鼓・ラジカセ
・体ジャンケンの形の確認		
・近くの人と 2 人組み		
・ウォーキング→太鼓→2 人組（握手→自己紹介→お互いの良いところなど）※勝った方から	2 人	
・2 人組で手つなぎスキップ→太鼓→2 対 2		
※ジャンケンの出し手を相談		
・4 人組で手つなぎスキップ→太鼓→4 対 4	4 人	
※ジャンケンの出し手を相談		
2 ○人組を作ろう		
※間をウォーキング、スキップ、ランニングで、太鼓の音で合図	2 人	
2 人：1 対 1 鬼ごっこ		
3 友達との交流		
・ロック（新聞紙を活用）		新聞紙・ガムテープ
※同人数乗る場所を減らす 乗る面積は同じで人数は増やす		
・平均台アルファベット		
4 ペアストレッチ・リラクゼーション		
・肩押し ・横向き ・アキレス腱		
・背に乗せる ・足ぶら ・手ぶら		
脈拍測定/腹式呼吸		

4 まとめ【成果と課題】

2020 東京オリンピックを目前に、「沖縄発祥の空手道」に関する歴史的背景や武道の教育的意義、オリンピックの意義等について理解させるため、授業導入例やワークシートを工夫し、事例を提示することができた。また、運動の二極化や体力低下が叫ばれる中、運動に親しむ資質能力が育まれるよう、夏期短期研修や長期研修などの実践を参考に「体づくり運動」における指導を工夫した事例を提示することができた。体育学習の指導の工夫改善を行うことにより「豊かな心」「健やかな体」の育成につながるものと期待できる。

〈参考文献〉

文部科学省 2017 『中学校学習指導要領解説 保健体育編』
 沖縄県教育委員会 沖縄県版 2017 『学校体育における空手道指導書』

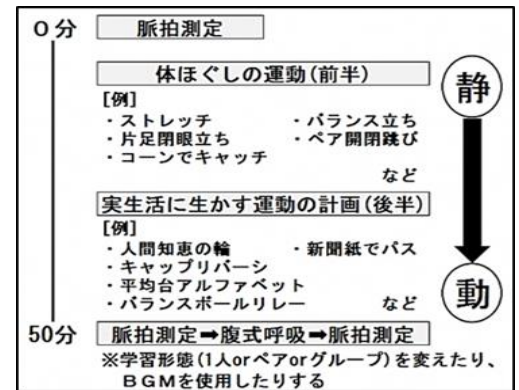


図 1 授業の流れ

< 美術 >

研究主事 上 原 進

1 「豊かな心」の育成をめざした美術科の教育内容の改善と充実について

中学校学習指導要領解説美術科（平成 29 年 7 月告示、以下「解説美術編」とする）の目標の改善では、「美術は何を学ぶ教科なのかということを明示し、感性や想像力を働かせ、造形的な視点を豊かにもち、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを一層重視する。」とある。豊かな心の育成を目指すには、「美術科の授業を通して何を学ぶのか」について表現や鑑賞の授業を展開し、造形的な見方・考え方を働かせながら、造形的な視点を豊かに育て、生活や社会の中にある美術や美術文化と関わりを深めることが重要である。各美術教師は、このための手立てを意識的に題材目標、授業展開、評価において図り、実践していく必要がある。

2 「豊かな心」と美術科の資質・能力の(2)の内容との関連

解説美術編では、「(2)造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想したり構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。」とある。「豊かな心」と(2)の内容についての関連から考えると、例えば、解説美術編では「造形的なよさや美しさは、形や色から感じるよさや美しさとともに外見にはみえない本質的なよさや美しさなどのことである」とある。この本質的な美しさは、表現活動で作者の意図を色や形の中に表す工夫をしていく中で表現されていく。また鑑賞活動では、作者の意図や工夫の意味を考えることで見方や感じ方も深まる。このように表現活動や鑑賞活動を関連しながら色や形の美しさに作り手の思いをくみ取ることで豊かな心の育成につながる。

3 豊かな心の育成と題材のテーマとの関連

解説美術編では「(3)美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。」「情操とは、美しいものや優れたものに接して感動する、情感豊かな心といい、情緒などに比べて更に複雑な感情を指すものとされている。」とある。情操は、美術の授業の表現活動や鑑賞活動を通して育まれていく。例えば、表現活動では、自分の気持ちを大切に描いたり、生活の中の美術の働きを考えながら制作したりする。また鑑賞活動では、自然や美術作品のよさや美しさ、創造の知恵や仕事への共感・感動などを味わう。このような活動を行いながら情操を培うことで豊かな心の育成につながっていく。

豊かな心の育成を意識的に取り入れているかどうかについて、県内中頭地区の美術教師 23 名にアンケートを実施した。(Ⅲの質問の、「他人を思いやる心、生命や人権を尊重する心、自然や美しいものに感動する心、正義感や公正さを重んじる心、勤労観・職業観」は「文部科学省施策目標 2－2 豊かな心の育成」から参考にした。)

表 1 アンケート 「豊かな心の育成」の取組 (N=23)

内 容	1 あてはまる 3 どちらかといえばあてはまらない	2 どちらかといえばあてはまる 4 あてはまらない
I 授業の題材名の中に「豊かな心」に関する内容を入れる。	1 (7名 30.4%)	2 (7名 30.4%) 3 (7名 30.4%) 4 (2名 8.8%)
II 授業の題材目標の中に「豊かな心」に関する内容を取り入れている。	1 (8名 34.8%)	2 (6名 26.1%) 3 (5名 21.7%) 4 (4名 17.4%)
III 題材名や目標の中に「豊かな心」を取り入れたことがある場合、どのような内容を取り入れましたか？(複数回答 OK) 回答数 19 名	①他人を思いやる心 (10名 52.6%) ②生命や人権を尊重する心 (8名 42.1%) ③自然や美しいものに感動する心 (17名 89.4%) ④正義感や公正さを重んじる心 (12名 5.3%) ⑤勤労観・職業観 (2名 10.5%)	
IV 「豊かな心」に関する内容を目標の中に入れる場合、どの評価観点に入れましたか？(複数回答 OK) 現行指導要領回答数 21 名 新学習指導要領回答数 18 名	現行学習指導要領 ①意欲・関心・態度 (13名 61.9%) ②発想・構想 (14名 66.7%) ③技能 (5名 23.8%) ④鑑賞 (14名 66.7%)	新学習指導要領 ①知識及び技能 (2名 11.1%) ②思考力・判断力・表現力等 (12名 66.7%) ③学びに向かう力、人間性 (15名 83.3%)

Iの項目の回答から、題材名の中に「豊かな心」に関する内容を約60%取り入れ、IIの項目の回答では、題材目標の中にも意識して取り入れているのがわかる。IIIの項目の回答では、③自然や美しいものに感動する心に約89%を占め、教科の特性がうかがえる。IVの項目の回答では、どの評価観点に入れるかでは、現行学習指導要領は①意欲・関心・態度に約60%、「豊かな心」から態度の向上を評価に取り入れたり、②発想・構想は約66%、「豊かな心」から発想を始めることを評価に取り入れている。また、④鑑賞は約67%、「豊かな心」の視点から作品の鑑賞を深めることができるかを評価に取り入れている。新学習指導要領でも同様なことが伺え、表1のアンケート結果からは、「豊かな心」の育成を授業の目標などに取り入れ、評価の中にも関連や活用している教師の姿をみることができた。

4 授業展開と評価

表2は授業展開と評価の中に「豊かな心」に関する内容が取り入れているのか、引き続き検証した。

表2 アンケート 「豊かな心の育成」の取組 (N=23)

内 容	1 あてはまる 3 どちらかといえばあてはまらない	2 どちらかといえばあてはまる 4 あてはまらない
V 授業展開（生徒の活動、教師の活動）のなかに「豊かな心」に関係する内容を取り入れている。	1 (5名 21.8%) 2 (9名 39.1%) 3 (7名 30.4%) 4 (2名 8.7%)	
VI 授業とは関係なく、「豊かな心」に関することを常に意識し指導している。	1 (6名 26.1%) 2 (10名 43.5%) 3 (4名 17.4%) 4 (3名 13.0%)	
VII 「豊かな心」について生徒の変容を意識して確認するためのワークプリントへの記入を行っている。	1 (0名 0.0%) 2 (12名 54.6%) 3 (7名 31.8%) 4 (3名 13.6%) 無回答 1名	
VIII 表現や鑑賞の活動の、題材目標の中に「豊かな心」に関することは入れてなくても、生徒の作品から「豊かな心」に関する表現が生まれたら、評価として加えますか？	1 (8名 36.4%) 2 (9名 40.9%) 3 (3名 13.6%) 4 (2名 9.1%) 無回答 1名	
IX 加えるとしたらどの評価項目にいきますか？（複数回答 OK）	1 意欲・関心・態度 (10名 43.5%) 3 技能 (2名 8.7%)	2 発想 (13名 56.5%) 4 鑑賞 (12名 52.2%)

Vの項目では、授業展開の中には約61%も取り入れており、I、IIの結果に近い結果がでており、目標に入れる事で、授業展開にも取り入れていることが分かった。VIIの項目は普段から生徒対応にも意識して取り組んでいることが分かった。VIIの項目の「生徒変容の見取り」では、約54%となっており、I、IIの結果と比べて減少している。これは、作品の中に「豊かな心」が表現されることがあるので、ワークシートの中ではあえて確認していないことが伺える。しかし、題材名、題材目標に「豊かな心」に関する内容を入れるのであれば生徒の変容を見取ることも必要であろう。VIIIは、生徒作品の中に、「豊かな心」の内容を感じ、発想を深く思考した結果ととらえる為約77%の教師が評価として加える結果となったのだろう。IXでの「発想」に加えるが約56%あることから前途のことがうかがえる。また「4鑑賞」の約52%は、鑑賞のワークシートなどで「豊かな心」に関する内容があると、深い思考につながるから評価に加えるのであろう。

表1、2のアンケートから、美術の授業を通して、題材名、題材目標、授業展開、評価を取り入れていることがうかがえた。だが、その中でも評価の位置づけに不安があるのではないかと感じられる。令和元年6月文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センターから「学習評価の在り方ハンドブック」が出されたがその中に「各教科における評価の基本構造」があり、その内容に沿った評価の方法を確認する必要がある。

5 美術の授業を通しての生徒の変容の在り方

解説美術編目標の(3)の内容には「学びに向かう力、人間性等」について示している。「主体的に美術の学習に取り組む態度を含めた学びに向かう力」や、「美術の創造活動の喜び」、「形や色彩などのコミュニケーションを通して生活や社会と主体的に関わること」、「美術文化の継承と創造に向かう態度」、「豊かな感性や情操」など、情意や態度等に関するものなどがある。態度や豊かな感性や情操などの育成を図る内容となっている。各美術教師は、具体的にどのような思いで授業に臨んでいるのか。今年度の夏期短期研修、各教育事務所での美術科担当者研修で行い、ワークショップで得られた内容を分類した(表3)。

表3 ワークショップから (N=41)

1 見方・考え方 の視点	・周りの物に目を向け、興味のある物を探せる様になってほしい。 ・自分らしい価値を持つことができる。 ・美しいものや面白いものや工夫されている物を見つけることができる。 ・自分らしい価値観。 ・美術への興味関心を持ち、そこから自分の身の回りのものへ視点を向け多様な見方、価値観を感じてほしい。
2 資質・能力(1)	・できなかったことができるようになる。 ・道具を使える生徒になってほしい。 ・知らなかったことを知る。 ・知識や技能を活用することができる。
3 資質・能力(2)	・表現したいことを言葉にして伝える力。 ・自由な鑑賞と表現。
4 資質・能力(3)	・身の回りの物、美しいもの大切にしたいという気持ち。 ・美術に興味関心を持つ、つくったり、表現することが好きになる。 ・つくる事、描くこと、鑑賞することが楽しいと感じられる。 ・作品、自然などを守る、大切にすること、大切だと思う気持ちを持つ。 ・自分自身の思いや考えを表現できる、楽しいと思う。 ・達成感（苦しみあとの喜び）を経験させ粘り強く、取り組む生徒を育てたい。 ・対話を通して、自分なりの表現方法と出会い、達成感や充実感または、もっとやりたいという気持ちを持てるようにしたい。 ・自分の表現を大切にすること。 ・自分の考えや思いが表現できるようにしたい、美術を楽しみと思える。 ・自分の作品に対して愛着を持ったり言葉で理由を述べたりする。 ・作品制作を通して自分らしさを表現できた肯定感。 ・学びを生活に取り入れ、美的情操（物の見方・考え方）が身についている。 ・より豊かな心で生活しようとする姿勢が身についている。 ・計画的に制作し決められた期間内で作品を提出し、計画性を学んでほしい。 ・自分の作品を通して、自分をみつめ、表現したことで環境や人が変化することを感じてほしい。
5 道徳教育の内容	・自分の考え、意見がある子（自主、自立）。 ・様々な価値を受け入れられる（相互理解、寛容） ・様々な意見や表現を受け止められることができ、多様性の受け入れ、他者への配慮（相互理解、寛容）。 ・自分自身の思いや考えを表現できる（相互理解、寛容）。 ・自分の考えや意見を持つことができる（自主、自立）。 ・自分と他者の違いやよさに気付く（相互理解、寛容）。

その結果、「見方・考え方」「資質能力(1)(2)(3)」「道徳教育の内容」に分類できた。1 見方・考え方では、「身の回りの物に興味関心をもち、多様な価値感を感じてほしい。」「美しいものや面白いものの工夫されている物を見つけることができる」等がある。これらの回答から、身の回りにあるものの美しさを見つけてもらいたいという願いが感じられ、見方・感じ方を働かせることで美しいものを見付けることへの期待が分かる。見方・考え方を働かすことで、豊かな心の育成につながることも読み取れる。4 資質・能力(3)、「つくる事、描くこと、鑑賞することが楽しいと感じられる」「自分の作品に対して愛着を持ったり言葉で理由を述べたりする」など、自分の作品に愛着を持ってなくては身の回りにある美しいものに美しいと感じられず「美術の創造活動の喜び」、「豊かな感性や情操」「形や色彩などのコミュニケーションを通して生活や社会主体的に関わること」などの願いが見られる。5 道徳教育の内容も見られ（解説美術編解説美術編付録7より）自主・自立、相互理解・寛容、などが多く見られた。豊かな人間性の育成を美術の授業を通して図りたいという内容もあった。2 資質・能力(1)は、解説美術編「目標の(1)対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする。」知識・技能に関する内容である。2、3 のアンケート結果が少ないのは、知識や技術よりも、4 の内容を重視したいと現れたことは興味深い結果となった。これらのアンケートから、豊かな心の育成を目指す教師像を読み取れることができた。

6 まとめ【成果と課題】

豊かな心の育成に美術教師がどのような姿勢で臨んでいるのかについてアンケートやワークショップから考察してきた。豊かな心の育成と美術教師の思いや取り組みが表1、2、3から見ることで、これらの内容を各美術教師が常に教科経営の中に入れておく必要がある。それらの考えに立ち、普段の授業から、表3のような意識をもちながら、「美術科の授業を通して何を学ぶのか」を豊かな心の育成の視点から新たに考えを深め、指導案等へ書き込むことでより意識化を図り、授業展開及び、評価の工夫へとつながっていくと考える。